

初期アジア映画供給網の形成 ——香港を事例として

笹川慶子

1 緒言

アジアの主要都市に映画が渡来したのは1896年から1897年である。シンガポールや上海、マニラ、神戸、横浜などの開港都市に運ばれ、そこからさらに都市を中心に広まっていった。アジアに映画市場が形成され始めた頃、その市場の多くが開港都市だったことから、映画の伝播する過程は19世紀末から20世紀初頭の汽船航路と密接に関係していたことがわかる。

映画をアジアにもたらしたのは貿易商や巡回興行者である。映画装置と映画は当時、産業資本と科学技術の発展した欧州やアメリカで生産されていた。アジアでは、自動車や時計など高級品を扱う輸入貿易商が欧米から映画装置と映画を取り寄せて販売、賃貸、興行することもあれば、手品や踊りなどのヴォードヴィル芸人や見世物興行師らが映画と一緒にアジアの大都市を巡回することもあった。アジアの人々にとって映画とは西洋モダニティの経験をもたらす装置だったのである。

渡来した当初、映画は都市の市民ホールやホテル、西洋式劇場、娯楽場やテントなどで興行された。興行の席料はどここの国でも高級演劇より安かったが、大衆娯楽よりはずっと高かった。したがって当時映画を見ることができたのはアジアに居住する外国人や現地の upper class、富裕層、知識層など経済的に余裕のある人々だった。

映画興行はアジアの大都市でほぼ同時に盛んになるが、土地によって歴史や文化が異なるため形成される映画市場も多種多様な様態を呈する。例えば、早

くから外国人のコミュニティが形成されていた開港都市である上海とマニラを比べると、イギリス人などの外国人が租借地で中国人と共に暮らす上海と、宗主国がスペインからアメリカに代わり文化が大きく変容していたマニラでは、それぞれ異なる映画市場が形成されていたのである。

本論文の目的は、こうしたダイナミックな変容を重ねていた20世紀初頭のアジア映画市場に香港を位置づけることにある。香港は同時代のシンガポールや上海、天津、マニラ、大阪、東京、台北、ソウルなど他のアジアの映画市場と何が同じで何が異なるのか。20世紀初頭のアジアで香港映画市場はどのような存在だったのか。このような問いを明らかにするため本論文ではまず先行研究に依拠しつつ香港映画市場の形成過程を明らかにする。次にアジアが欧州起源のグローバルな映画配給網に接続されたあと、市場がどう変わったのかを跡づける。最後は20世紀初頭の香港映画市場を映画配給および興行の観点から捉え直し、グローバル化するアジアの映画流通網のなかに位置づけたい。

本研究は主に各都市で発行された新聞資料を使用する。香港に関しては主に『チャイナ・メール』*China Mail* (1845年創刊)、『香港テレグラフ』*Hongkong Telegraph* (1881年創刊)、『香港デイリー・プレス』*Hongkong Daily Press* (1857年創刊)を用いた。

2 香港映画市場の形成

巡回興行

香港の映画興行は、アジアの他の都市と同じく、不定期の興行から始まる。興行者が映画装置と映画をもって都市から都市へと移動し、地元の演劇や演芸などの劇場や娯楽場、あるいは教会やレストラン、学校など人の集まる場所を数日借りて、他の見世物などと一緒に映画を上映していたのである。

香港で映画が初めて上映された日がいつかははっきりしない。ただ香港映画産業草創期の歴史を研究するローカ (Law Kar) とフランク・ブレン (Frank Bren) は1897年4月の『チャイナ・メール』に掲載された広告の興行が最初である可能性が高いという¹⁾。1897年4月26日に試写がおこなわれ、一般向け

興行は4月28日から5月4日まで1週間続いた。一般向け興行は最初、27日に予定されていたのだが、技術的な問題のせいで1日延期される。

上映場所はセント・アンドリュース・ホール（St. Andrew's Hall）である。このホールは1869年に建てられたシティ・ホールに併設されていた劇場である²⁾。シティ・ホールは西洋式建築の建ち並ぶ区域にあり、道を挟んで反対側にはビーコンズフィールド（Beaconsfield）という名のアーケードがあった。上映されたのはフランス、リュミエール兄弟が開発したシネマトグラフである。興行者は上海などアジアの大都市を巡業していたフランス人のモーリス・シャルベ（Maurice Charvet）だった。興行は1日5回、11時と14時30分、17時30分、21時、22時15分におこなわれた³⁾。

19世紀末の映画興行記録は現在ほとんど残っていない。それゆえシャルベより前に香港で映画興行がなかったとは言いきれない。シャルベより前に興行はあったが、活字にならなかったか、あるいは活字化されたが、まだ発見されていない可能性はある。当時中国ではシャルベのほかにハリー・W・クック（Harry W. Cook）、カール・ヘルツ（Carl Hertz）、アーネスト・F・G・ハッチ（Ernest F. G. Hatch）、G・S・ヘルツベルク（G. S. Hertzberg）などの興行師が、香港や上海、天津、漢口など外国人居住者の多い都市を中心に巡業し



左はシティ・ホール、右はビーコンズフィールド
（上海市歴史博物館編『香港旧影』上海書画出版社、2010年、95頁）

ていた⁴⁾。したがって現在確認できる最も古い興行が1897年4月28日付『チャイナ・メール』に掲載されたシャルベの興行であるにすぎない。

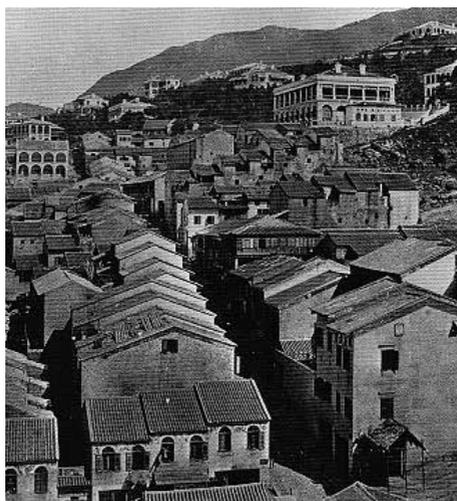
とはいえ、1896年前後に香港で発行された英字新聞を見ると、その頃すでに欧州での映画興行の様子がアジア在住の外国人向けに時々報道されていたことがわかる。香港で暮らす欧米人にとって映画は、まだ見ることのできない、遠く離れた故郷で話題の最先端娯楽のひとつだったのである。彼らが香港での映画上映を待ち望んでいたであろうことは想像に難くない。ゆえに香港で、もしシャルベより前に映画興行がおこなわれていた、あるいはおこなわれようとしていたならば、必ず報道されていたはずである。したがってシャルベによるセント・アンドリュース・ホールでのシネマトグラフ上映に関する報道が、現時点で発見された香港で最初の映画興行に関する主要新聞の報道であるならば、それが香港初の可能性は極めて高いと考えられる。

草創期の香港の映画興行は、アジアの他の都市と同じく、主に経済的に裕福な人々を対象におこなわれていた。そのことは映画のチケットがオメガなど高級時計や車、宝石を扱う舶来高級品店で売られていたことから推察できる。映画はよく大衆娯楽と言われるが、草創期の映画興行は席料が高く、一般の労働者にはまだ手の届かない娯楽だった。アジアにおける映画消費の大衆化が進むのは映画のグローバルな流通システムが確立する1900年代末から1910年代初頭である。興味深いのは、そうした観客層の推移——上流階級や富裕層、知識人から中流以下の大衆へ——が香港だけでなく、他のアジアの大都市、例えば東京や大阪、シンガポール、上海、マニラなどでも、多少差はあるものの、ほぼ同時期に起こっていた点である。

なかでも香港は、上海と同様、かなり早くから映画観客の大衆化が始まる。香港で中国人大衆を対象とした映画興行が始まったのは1900年頃である。もともと粵劇が娯楽として発展し、市内には多くの劇場があった⁵⁾。映画はそれらの劇場で舞台のあとの第二興行で上映され始める。第二興行とは1900年代末から1910年代初頭、戲園や茶園、遊樂場で開かれた演劇の本興行が終わったあとの廉価な席料の興行を指す。当時「奇巧洋画」と称された映画は、例えば重慶

園で1900年2月に上映された。重慶園は上環大安台に1867年に開場した同慶戲園を改称、再開場したと言われている。また1900年6月には、皇后大道西の甘雨街と高陞街のあいだに開場した高級劇場の高陞戲園でも興行された。ほかに皇后大道西と德輔道西のあいだの屈地街にあった太平戲院、中環（Central）の雪廠街や荷里活道あるいは、尖沙咀などにあった大小さまざまな興行場で上映されていた⁶⁾。当時香港に滞在していたアメリカ人撮影技師R・F・ヴァン・ヴェルツァー（R. F. Van Velzer）によれば、本興行の席料は50セントから1ドル50セント、第二興行はだいたい5セントから10セントで、第二興行の客は主に中国人だったという⁷⁾。ヴェルツァーは香港とサンフランシスコ、横浜、ホノルルなどで映画事業を展開していたベンジャミン・ブロッスキー（Benjamin Brodsky）が香港に設立した中国製造影片有限公司（China Cinema Co. Ltd., 1914年～1918年）で一時期、撮影や編集、現像を担当していた人物である。

こうした香港の第二興行で映画を上映していたのは、どのような人々だったのだろうか。先行研究を辿ると、杏同春や永同春、普同春、國豊年、祝壽年、祝堯年、周豊年、華記、裕記、喜来園、確牲園、新喜来などの名前が浮かび上



右端手前の建物が同慶戲園 屋根の下に看板あり
（鄭寶鴻編著『百年香港華人娛樂』経緯文化出版、2013年、21頁）



左から2番目の建物が高陞戲園

(鄭寶鴻編著『百年香港華人娛樂』経緯文化出版, 2013年, 26頁)

がってくる⁸⁾。そのうち杏同春や永同春、普同春、國豊年、祝壽年、祝堯年、周豊年などは演劇の一座の名前であり、華記や裕記は映画を興行する業者の名称であろう。注目したいのは、喜來園や確牲園など最後に「園」の付く名称である。「園」は香港映画史でこれまで劇場と見なされてきた。例えば香港映画史の大家・余慕雲は喜來園が1901年1月に映画上映を開始した、香港で最初の映画館(「臨時性電影院」と述べる⁹⁾)。また趙衛防の『香港電影史』は、1900年12月に香港初の映画館・喜來園が開業し、55日間連続で営業したとある¹⁰⁾。さらに羅維明も、喜來園は最初、荷里活道68号で営業していたが、1901年1月に中環雪廠街に移り、1902年10月には荷里活道140号に移転するという¹¹⁾。それぞれの興行は荷里活道68号で1900年11月5日から12月27日までの約1か月、中環雪廠街で1901年1月27日から2月8日までの約2週間だった。このように先行研究では喜來園を映画館とみなし、喜來園の興行場所の変化をその移転と考えているのである。

しかし、喜來園を映画館とするのには無理がある。喜樂園は巡回興行の名称と考えるべきであろう。同じ頃、アジア各地を巡回興行していたパリ・シネマ

トグラフ（Paris Cinematograph）がシンガポールで簡易な映画館と誤認されたのと同じく、1900年前後の香港で「園」と名のつく興行は、興行期間が最初期より長くなったとはいえ、常設興行ではなく巡回興行の一種だったと考えられる。つまり、喜来園を香港初の映画館と見なす記述は正確ではなく、いわゆる映画館——映画を専門に常設興行する劇場——が香港に登場するのはもっとあとである。

こうした商業的な映画興行のほかにも香港では、映画が教会や地域コミュニティの主催する慈善事業で早くから上映されていた。例えば1899年4月にはセント・ポール教会のホールで映画を上映した記録が残っている¹²⁾。また、1900年1月にはE・F・G・ハッチがセント・アンドリュース・ホールで南アフリカ支援金募集のための上映会を開催し、エジソン社の『アナベルのサーペンタイン・ダンス』*Annabelle Serpentine Dance*（1895年）やリュミエール社の『ラ・シオタ駅への列車の到着』*L'arrivée d'un Train à La Ciotat*（1896年）などを上映した¹³⁾。上海の聖約翰大学（現在の華東政法大学）三代目学長ホークス・ポット（Francis Lister Hawks Pott）は「イギリス人の行くところ到处教会と競馬場あり」と述べたが¹⁴⁾、慈善活動もそのひとつだった。香港で映画は、上海と同じく、そうした慈善バザーや募金活動などによく利用されていたのである。



粵劇の演技者たち

（上海市歴史博物館編『香港旧影』上海書画出版社，2010年，231頁）

常設興行

香港の場合、劇場の開場ラッシュは1907年に始まったとされている。例えば、羅維明は1907年に香港初の劇場であるビジョー劇場（比照戲院 / Bijou Theatre）が設立され、続いて香港劇場（香港影画戲 / Hong Kong Film Show のちの香港影画戲院 / Hong Kong Film Theatre）、そして「真正的電影院（real cinema）」のヴィクトリア劇場（域多利新法活動影画 / Victoria New Style Motion Picture）などが次々開場するという¹⁵⁾。ほかにも南洋影戲会社が皇后大道西496号に、意大利影戲会社が水坑口の洞天酒樓の左隣に、捷成洋行が水坑口16号に、アメリカ人興行師が皇后大道中37号に、日本の興行師が徳輔道中14号に「映画館（Cinema）」を開場したと述べる。

羅維明以外にも、余慕雲の『香港電影史話 黙片時代1896年～1929年』（1996年）、程季華らが編集した『中国電影図史（1905-2005）』（2007年）、周承人と李以庄の『早期香港電影史：1897-1945』（2009年）、鐘寶賢の『香港影視業百年』（2011年）など多くの映画史家が同様の指摘をしている¹⁶⁾。



1911年に新築再開場したヴィクトリア劇場
（上海市歴史博物館編『香港旧影』上海書画出版社，2010年，111頁）

以上のことから香港映画史では、1897年頃から市民ホールや演劇の劇場など高級な娯楽場で外国人や裕福な中国人に向けて上映され始め、すぐに第二興行や簡易の「映画館」などで中国人大衆に向けても上映されるようになり、そして1907年には本格的な「映画館」が開場したと考えられていることがわかる。これらの「映画館」がどのような興行をしていたのかについては後で検証するが、ここで注目したいのは、こうした市場変容は香港だけでなく、20世紀初頭のアジア主要都市の多くで起こっていたという事実である。

3 アジア映画市場のグローバル化

1907年がアジア映画市場の発展史において重要な転換点であったことは確実である。しかし、具体的にアジアの市場がどう変容したかについては、これまで明らかにされてこなかった。そこで以下では当時映画が盛んに興行されていたアジアの開港都市——シンガポール、上海、マニラ——を事例にとりあげ、アジアが経験したダイナミックな市場変容を検証していく。

シンガポール

シンガポールの映画興行は遅くとも1899年までには始まる。例えば1899年8月1日付『シンガポール・フリー・プレス・アンド・マーカンティル・アドヴァタイザー』*Singapore Free Press and Mercantile Advertiser*には、巡回興行者のベレスフォード-ペティット・サプライズ隊（Beresford-Pettitt Surprise Party）がヴォードヴィルの舞台と一緒にアメリカン・バイオグラフ（American Biograph）社の映画を近々上映する予定であると報じている¹⁷⁾。ヴォードヴィルの舞台はベレスフォードが、映画上映はペティットが担当した。地元の英字新聞『ストレイツ・タイムズ』*Straits Times*には、興行の数日前から予告の掲載が始まり、8月16日付の広告には「今ロンドンで大流行」という惹句入りで興行の具体的な内容が宣伝されている。上映場所はタウン・ホール。興行は21日のみ、夜8時15分と9時の2回興行だった¹⁸⁾。席料は指定席2ドル、普通席1ドル、映画のイメージが反転するスクリーン裏席50セント、子供は半額で

ある。チケットは贅沢品の輸入貿易商ロビンソン・ピアノ社 (Robinson Piano & Co.) が販売した。シンガポールではほかにも「エジソン・シネマトグラフ」や「英国シネマトグラフ」「パリ・シネマトグラフ」などの巡回興行の一座がタウン・ホールやパレス劇場、マレー劇場などを借りて短期間の興行をおこなっていた。

巡回ではなく常設の映画興行がシンガポールで始まるのは1906年頃である。その先駆者のひとりに長崎出身の播磨勝太郎がいる。播磨は孫文の革命に資金を援助していた梅屋庄吉とともに香港からシンガポールに移住し、ビーチ・ロードのラッフルズ・ホテル近くにあったマツオ (K. Matsuo) 旅館を1905年12月に買収して、1906年2月までに映画の常設興行を始める。興行名は「マツオのジャパニーズ・シネマトグラフ (Matsuo's Japanese Cinematograph)」である。同館は1906年5月にパテ社と契約し、映画の供給を受ける¹⁹⁾。播磨はパテ以外にも、日本に帰国した梅屋が設立した映画会社Mパテ商会の製作した映画やアメリカの映画なども入手して上映していた。

播磨がビーチ・ロードで映画の常設興行を始めると、周辺に同業者が集まりだす。例えばイギリス、ハミルトン社のロンドン・クロノグラフ (London Chronograph) は1906年3月から7月頃までビーチ・ロード沿いの広場にテントを張って映画を興行した。また1906年8月25日にはロイヤル・シネマトグラフ (Royal Cinematograph) が開場する。その後も日本人カネイチ (Y.Kaneichi) のジャパニーズ・シネマトグラフ・ショー (Japanese Cinematograph Show), ジュビリー・ホール (Jubilee Hall), フレンチ・シネマトグラフ (French Cinematograph), ハミルトン社を辞めたS・M・マーチン (S. M. Martin) と日本人のシバタ (S. Shibata) の経営によるニュー・ジャパニーズ・シネマトグラフ (New Japanese Cinematograph) などが播磨の映画館の周辺で映画を興行し始める。こうしてシンガポールには最初の映画興行街が形成される。

1906年から1907年はシンガポール映画市場が急速に発展する年である。主因は世界に先駆けて映画供給のグローバル化を進めていたパテ社が、アジアの映画市場開拓の最初の地にシンガポールを選んだからである。パテ社はまず代理

人のフェレメレン（J. Vermeulen）を1906年7月までにシンガポールに送り込む。その後1907年8月にフェルナン・ドレフュス（Fernand Dreyfus）に極東代理人を委任し、パテ社シンガポール総代理店をスタンフォード通り19番地に設立する²⁰。代理店ではロンドンのパテ社が供給する映画を販売およびレンタルしていた。映画の価格は長さによって決められ、どんな映画も1フィート当たり4ペンス（シンガポール貨幣43セント／メートル）だった²¹。

パテ社の進出によりシンガポールの映画興行は新たな段階に突入する。興行師のライオネル・F・ウィリス（Lionel F. Willis）は1907年8月31日にグランド・シネマトグラフ・ショー（Grand Cinematograph Show）をビーチ・ロードに開場し、パテ社の映画を独占的に興行し始める。その約2か月後の1907年10月、ウィリスはビーチ・ロードとミドル・ロードの交差点の広場に収容人数800人から900人のアルハンブラ（Alhambra）劇場を新築開場する。そしてそのシンガポール随一の豪華劇場をパテ社のシンガポール総代理店が1907年12月に買収、ウィリスはその支配人におさまる²²。一方、アルハンブラ劇場の周辺にはビーチ・ロードにマールボロ（Marlborough）、ノース・ブリッジ・ロードにシアター・ロイヤル（Theatre Royal）やアレクサンドラ・ホール（Alexandra Hall）など大きな劇場が次々開場する。パテ社のシンガポール進出が開場ラッシュを生み出していたのである。

パテ社はシンガポール内で映画を供給し興行するだけでなく、シンガポールから映画をアジア各地に供給する流通網を構築していく。1907年8月16日付『ストレイツ・タイムズ』によれば、シンガポール総代理店はその時点ですでに「ビルマ、ジャワ、スマトラ、シヤム、香港、フィリピン」に映画を供給していたとある²³。こうしてアジア市場はシンガポール経由でグローバル企業の強力な映画供給の網目に縫い込まれていったのである。

欧州のグローバル企業の進出はシンガポール市場に複雑な変化をもたらす。その変化は例えば播磨勝太郎の活動からも読み取れる。播磨はまずビーチ・ロードを山側に一本奥に入ったノース・ブリッジ・ロードに新しい劇場ハリマのシネマトグラフ（The Harima's Cinematograph）を新築し、1908年5月にハ



新築開場した播磨ホールの正面に立つ播磨勝太郎
（『南洋画報』第1巻，南洋新報社，1911年，写真頁）

リマホール（Harima Hall）と改称する。同じ頃、播磨は大阪千日前に1907年12月に開場した映画館の文明館（大阪では電気館に次いで2番目に開場）に映画を供給し始め、1914年には大阪市東区京橋3-61番地に播磨商会を設立する。さらにイギリスの海峡植民地だったペナンやイポーに第二、第三ハリマホールを開場し、自社の映画配給網を広げていった。こうした播磨の映画事業拡張はパテ社のシンガポール進出直後に始まっている。このようにパテ社の進出は、シンガポールに劇場の開場ラッシュを引き起こし、シンガポールの映画市場規模を増大させただけでなく、シンガポールを拠点とする複層的なアジア映画供給網の形成と拡張にも寄与していたのである。

上海

上海もシンガポールとほぼ同じ頃に大きな変容を経験している。上海の場合、映画は遅くとも1897年にはすでに上映されていた。従来の中国映画史で上海の映画興行は1896年8月11日の徐園が最初とされてきた。だが、この定説に異を唱える者もいる。例えば映画史家の黄徳泉は徐園の興行は8月11日ではなく6月30日に始まり、しかもそれは幻燈であり、映画の興行は興行師ハリー・W・クックが1897年5月にアスター・ハウス・ホテル（礼查飯店/Astor House

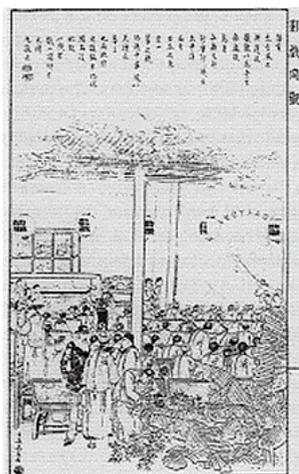
Hotel) で上映したアニメスコープが最初だと主張する²⁴⁾。また羅カとフランク・ブレンも同様の指摘をしている²⁵⁾。日本最初の映画興行は覗き眼鏡式が1896年12月、スクリーン式が1897年2月だったことを考えると、当時アジア最先端の大都会だった上海が1897年5月というのは少し遅いように思われる。とはいえ今後新たな記録が発見されない限り、現時点では議論に決着はつかず、ゆえに上海の映画興行は少なくとも1897年までには始まっていたとしか言えない。

草創期の上海で映画の興行場所は2つに大別できる。ひとつは、市民ホールやホテル、西洋式劇場など主に外国人が出入りする場所、もうひとつは、茶園や菜園、娯楽場、庭園など主に中国人が出入りする場所である。前者の例としては1893年、静安寺路の張園に開場した2階建て西洋式ホールのアルカディア・ホール（安壇地大洋房/Arcadia Hall, 1,000人収容）や、円明園路に外国人専用劇場として開場したライシャム劇場（蘭心戲院/Lyceum Theatre, 700人収容）などがある。1897年6月、アルカディア・ホールでのアニメスコー

徐園告白
本園於二十日起夜至十
二點鐘止內設文虎清曲
童串戲法西洋影戲以供
遊人隨意賞玩向因老關
橋北一帶馬路未平阻人
遊興現已平坦馬車可直
抵園門維冀諸君踏月歸
去可無徒步之虞遊資仍
照舊章准廿三夜外加烟
師火戲遊資每位三角此
乙亥三

「徐園告白」の記事

（『申報』1896年6月30日付）



申報館の絵入新聞『点石齋画報』
茶園での幻燈上映

（『点石齋画報』廣東人民出版社、
1983年、巳7-49右頁）

プの興行は席料1元だった²⁶⁾。一方、後者の例は、四馬路の天華茶園や広東路の同慶茶園といった立派な茶園もあれば、乍浦路中西書院北首の東京活動影戲園(席料1～3角)、武昌路4号の東洋廟隣の東和活動影戲園(席料1～3角)、四馬路の青蓮閣の東側および上海县城内共和春の新開幻影電光影戲園(席料1角)など安い娯楽場もあった。アジア最大の租界があり、イギリス人やフランス人、ロシア人、日本人などの外国人が中国人とともに暮らしていた上海では、映画が多種多様な場所で上映され、多彩な人種が混ざり合って鑑賞していたのである。とはいえ劇場に明らかな階級差はあり、格式ある劇場ほど外国人が多く、安価な娯楽場は中国人が多かった。

上海の映画市場規模が急速に拡大するのはシンガポールより少し遅い1908年頃である。例えばアメリカン・シネマトグラフ社(American Cinematograph Co.)は映画の常設興行を1908年に始める。同社は北四川路51号にあったヴォードヴィル劇場パレス・オブ・ヴァリエティズ(Palace of Varieties)を買収し、そこで歌や踊りなどの舞台と一緒に映画を定期的に上映し始める²⁷⁾。ホールはのちにアメリカン・シネマトグラフ・ホールと改称される。1911年にこのホールは売却、解体され、その跡地にアポロ劇場(愛普廬影戲園/Apollo Theatre)が開場、パテ社上海代理店と供給契約を結ぶ²⁸⁾。アメリカン・シネマトグラフ社はまた、後述するマニラの高級劇場ソリーリャにも映画を供給していた。

別の事例としてラモス・エンターテインメント社(Ramos Amusement Co.)がある。経営者のアントニオ・ラモス(Antonio Ramos)は米西戦争でスペインからマニラに渡り、マニラで映画興行に関わったのち上海に移り、青蓮閣などの茶園を借りて映画などを興行し成功する²⁹⁾。その成功をもとにラモスは1908年、上海で最初の映画館と言われるホンコウ劇場(虹口活動影戲園/Hongkou Theatre, 250人収容)を共同租界の乍浦路と海甯路の交差点、中西書院北首112号に開場する³⁰⁾。席料は1～3角と安価である。ラモスはホンコウ劇場に続いて、外国人専用のヴィクトリア劇場(維多利亞影戲園/Victoria Theatre, 750人収容)を海甯路24号に、豪華なオリンピック劇場(夏令配克影戲園/Olympic Theatre, 1,000人収容)を静安寺路に、エンパイア劇場(恩

派亜影戲園 / Empire Theatre) をフランス租界の霞飛路に、中国人向けのカーター・ロード劇場 (卡德路影戲園 / Carter Road Theatre) を共同租界の卡德路に開場した³¹⁾。アメリカ商務省の報告によれば、ヴィクトリア劇場ではパテ社の供給する映画を上映していたという³²⁾。ラモス社の主要劇場であるヴィクトリア劇場がパテ社の供給ならば、同社の所有する他の劇場も同じだった可能性は高い。

このように1908年を境に上海ではそれまでの映画興行とは異なる新しい形態の興行が始まる。巡回興行者の映画に頼るのではなく、劇場が映画を入手し、常設興行に加えるのである。とはいえ、この頃の上海の劇場はまだ映画専門ではなく、舞台と映画の両方を興行していたことを忘れてはならない。

ではパテ社は上海にいつ代理店を開業したのだろうか。パテ社が上海に代理人のポール・ルブリ (Paul Le Bris) をシンガポール経由で派遣するのは1907年秋頃である³³⁾。ルブリは1907年10月24日、イギリス領事館の隣のユニオン教会で上海写真協会 (Shanghai Photographic Society) の会員を対象にシネマトグラフの撮影と現像の実演をおこなっている³⁴⁾。そして遅くとも1908年7月までには、上海の商社・柏徳洋行と代理店契約を結ぶ³⁵⁾。契約後、柏徳洋行は四川路99号に本店を新築開業し、四馬路老巡捕房西首中と里口に支店を、南京下関潤昌公司与江西洗馬池李怡昌号に営業所を設置、1910年4月に社名を百代公司与改める³⁶⁾。柏徳洋行改め百代公司是上海で主にフォノグラフ (蓄音機) やレコードの販売およびレンタルをおこなうが、映画装置や映画も扱っていた。つまりアメリカン・シネマトグラフ社やラモス社などの劇場経営者が映画の常設興行に乗り出すのは、パテ社の代理人が上海に到着した直後なのである。

マニラ

パテ社の上陸後、映画市場が一変するのはマニラも同じである³⁷⁾。マニラの場合、最初の映画興行は1897年に始まったと言われる。当時マニラ最大の繁華街だったエスコルタ通りに開店したフォノグラフ・パーラー、サロン・デ・パティエラ (Salon de Pertierra) で1897年の正月からフランス、ゴーモン社の

映画が上映された。前述したアントニオ・ラモスも上海に移住する前はエスコルタ通りで、こうした映画興行に関わっていた。その後、マニラのトンド地域でヴォードヴィル芸を挟みながら映画を見せる「シネマトグラフオ (Cinematografo)」という小規模な娯楽施設が興隆する。一方、オルフェウム劇場 (Orpheum Theatre) やパズ劇場 (Paz Theater) など大きなヴォードヴィル劇場、マニラ・グランド・オペラ・ハウス (Manila Grand Opera House) など歌劇場、パロマー・パーク (Palomar Park) など遊園地でも主に家族向けの出し物として映画が上映されていた。

パテ社のマニラ上陸は1909年5月である。『マニラ・タイムズ』*Manila Times* にはパテ社の広告が1909年5月7日から掲載され始め、27日には広告主がパテ・フレール社シンガポール総代理店のドレフェスから、エスコルタ通り100番地に店を構えていたC・アルカン (C. Alkan) に代わる。これはパテ社のシンガポール総代理店のドレフェスがマニラのアルカンを代理人に委任したことを示す。

パテ社のマニラ代理店開業後、マニラの映画市場が飛躍的に成長したことは映画館数の増加にはっきり現れている。パテ社がマニラに上陸した1909年5月から約2年半のあいだに、マニラには映画館が急増する。まず1909年8月9日、アンダ・シネマトグラフ (Anda Cinematograph) がアンダ通りとソラーノ通



F・ドレフェスが掲載した初出広告
(*Manila Times*, May 7, 1909.)



C・アルカンが掲載した初出広告
(*Manila Times*, May 27, 1909.)

りの交差点付近に開場する。経営者は元マニラ警察のフランク・H・グレット（Frank H. Goulette）とエディ・ティーク（Eddie Teague）である。また同じ日にヴォードヴィルのオルフェウム劇場が改築改称され、映画専門のエンパイア劇場（Empire Theater）として開場する。エンパイア劇場はアメリカ人のA・W・バート・イエースレイ（A. W. Bert Yearsley）が経営していた。さらに同じ頃ソリーリヤ劇場も映画を定期興行し始める。ソリーリヤ劇場（Zorrilla Theater）はオペラやスペインの大衆オペレッタであるサルスエラ（Zarzuela）を上演するため1893年8月17日に開場した豪華劇場で、オペラなど舞台のない日に映画を上映していた。場所はサン・ペドロ通りとビリビッド通りの交差するあたりである。劇場の所有者はラモン&ヴァレリアーノ・サントス（Ramon & Valeriano Santos）とフェデリコ・オルティス（Federico Ortiz）、アンドレス・フロイス（Andres Frois）だった。このソリーリヤも1910年2月22日には映画専門劇場として再開場する。

エンパイアとソリーリヤといった当時マニラを代表する劇場が本格的に映画興行を始めると、その成功に後押しされ、新しい映画館がマニラに次々開場する。まずアポロ劇場（Apolo Theater）が1910年5月14日エスコルタ通り58-60番地に開場。続いて、マジスティック劇場（Majestic Theater）が1910年8月頃アズカラガ通りに、ロイヤル劇場（Royal Theater）が1910年10月13日城塞都市イントラムロス内サンタ・ポテンシアナ119番地に、ラックス劇場



ソリーリヤの豪華なイラスト入り広告（Manila Times, February 13, 1911.）

(Lux Theater) が1910年11月4日プラザ・サンタ・クルーズに、マガリャネス劇場 (Magallanes Theater) が1910年11月21日イントラムロス内マガリャネス通り139番地に、アイディアル劇場 (Ideal Theater) が1910年12月13日プラザ・ゴイティ29-31番地に、メトロポリタン劇場 (Metropolitan Theater) が1910年12月頃キアポ教会広場に開場し、映画を上映し始める。

加えて、1911年9月までにはリベルタッド劇場 (Libertad Theater) がエルミタのベドロ・ジル通りハラン近くに、マドリッド劇場 (Madrid Theater) がサン・ニコラスのマドリッド通りに、リザル劇場 (Rizal Theater) がアンロアケ通りに開場した。さらにエルミタのリアル通り630番地にあったゲイエティ劇場 (Gaiety Theater) も1912年1月18日以降は興行内容を演劇から映画専門に転じている。

ほかにもイントラムロス内カビルド通り248番地にカビルド・シネマトグラフ (Cabildo Cinematograph), パズ通り521番地にスタア・シネマトグラフ (Star Cinematograph) など小さな映画館も複数開場した。名前に「シネマトグラフ」を冠した劇場の多くは、封切りから数年も経った古い中古映画を安い席料で興行していた。それらの劇場はたいてい新聞に広告を毎回掲載するほど余裕のない、事業規模の極めて小さな映画館だった。前述した「シネマトグラフ」の延長線上にあるような、こうした興行場は市の中心地のほかに郊外にも複数存在していたと考えられる。映画はそうした新聞に広告が掲載されないような興行場でも上映されていたはずである。

もちろん、パテ社の進出後、マニラに開場した劇場のすべてがパテ社から映画の供給を受けていたわけではない。例えばカビルドはパシフィック・メール汽船会社 (Pacific Mail Steamship Co.) のサンフランシスコ-アジア航路の船「S・S・モンゴリア号が運んだアメリカ製新作映画のみ」上映と宣伝していたことから、映画供給者はパテ社ではないと考えられる。また、ソリーリヤは再開場した頃、エジソン社の『シャーロック・ホームズ嬢』 *Miss Sherlock Holmes* (1908年) やヴァイタグラフ社の『西洋式求婚』 *Western Courtship* (1908年) などアメリカのモーション・ピクチャー・パテント・カンパニー (Motion

Picture Patents Company, 1908年設立）に属する会社の映画、いわゆるライセンス映画をよく上映しており、それらの映画は上海のアメリカン・シネマトグラフ社が供給していた。

マニラではまた、1910年頃に地元の映画配給興行会社が複数現れ、映画館の系列化も進む。例えば、イエースレイの経営でフィリピン初の映画会社と言われるオリエンタル映画社（Oriental Moving Picture Corporation）は、エンパイアやエアドーム、リベルタッド、マドリッド、マジエスティック、リザル、ロイヤル、スタアなどを所有していた。また、1910年12月にはR・F・ロセス(R. F. Roces)がアイディアル映画社（Ideal Moving Picture Company）を設立し、アイディアルやメトロポリタン、マガリャネス、パトリヤ（Patria）などの劇場を経営する。さらにビセンテ・アルベルト（Vicente G. Alberto）の経営によるパレス映画エクスチェンジ社（Palace Film Exchange）は、ラックスやパレス（Palace）、リッツ（Ritz）などの劇場を経営していた。これらの会社は系列の劇場を運営するだけでなく、映画も供給していたが、映画をどこから入手していたかははっきりしない。

しかし、マニラにパテ社が進出したあと開場した劇場の上映映画を調べると、多くがパテ社もしくはパテ社が供給した可能性の高い欧米の映画だったことがわかる。とくにアポロ劇場は確実にパテ社から供給を受けていた。オリエンタル映画社の所有する劇場も『パテ・ニュース』を定期上映していたことから、パテ社が供給していたと考えられる。またパレス映画エクスチェンジ社も、ラックス劇場でパテ社の大作『レ・ミゼラブル』などを上映していたことから、おそらくパテ社が映画を供給していたはずである。パテ社のマニラ進出とマニラの映画市場規模拡大は密接に関係すると考えられる。

このようにシンガポールや上海、マニラの事例を見比べると、多少時間差はあるものの、映画市場がそれぞれ大きく変容する時期と、各地にパテ社が代理店を開業する時期が重なっていたことが確認できる。それらの開港都市は早くから欧米の興行師が映画を巡業し、パテ社の代理店開業を契機に市場規模が飛躍的に拡大する点で共通する。ヴォードヴィルやオペラの大劇場が映画興行に

転じ、映画を上映する大小様々な興行場が急増するとともに、映画館の系列化や供給の組織化が進み、各都市とアジア各地との映画交渉の密度が増すのである。パテ社の進出がローカルな市場をグローバルな映画供給の網目に縫い取り、アジア市場に急激な変動を生み出していたことがわかる。

4 パテ社の香港上陸と香港映画市場

では同じ頃の香港はどうだったのだろうか。香港は1842年の南京条約で清朝からイギリスに割譲され、イギリス人を中心に多くの外国人が移り住み、対中国貿易の窓口として重要な役割を担っていた。その香港にパテ社はいつ、どのように上陸したのだろうか。パテ社は香港をアジアの市場開拓戦略にどう位置づけていたのか。パテ社の上陸は香港映画市場にどのような影響を及ぼしたと考えられるのか。それはシンガポールや上海、マニラなど同時期のアジアの開港都市と比べて何が同じで、何が違うのか。こうした問いを少しでも明らかにするために以下では、香港の英字新聞を調査した結果をもとに、20世紀初頭の香港映画市場の様相をグローバル化するアジア映画流通網のなかに浮かび上がらせたい。

パテ社の香港上陸

パテ社がいつ香港に映画の供給拠点を設けたかを明確に示す史料はまだ見つかっていない。『中国電影図史（1905-2005）』によれば、パテ社香港支店の開設は1915年11月15日だったという³⁸⁾。だが、これは支店であって代理店ではない。パテ社は支店を開設する前に、代理店を開業して映画供給をおこなっていたはずである。ではパテ社は香港にいつ代理店を開業するのか。この点に関する興味深い広告が香港の外国人向け新聞『チャイナ・メール』に掲載されている。以下にその広告文を記す。

THE TRIUMPH OF
MOVING PICTURES.

—
CINEMATOGRAPH PATHE.

—
WILL OPEN FOR THE SEASON

IN

WEISMANN'S LARGE HALL

(ENTRANCE: WYNDHAM STREET)

ON

SATURDAY NIGHT NEXT

AT 9 P.M.

—
PERFORMANCES EVERY NIGHT.

—
FILMS: Comprise the Comic Dramatic
and Pathetic Dements, and will conclude with
'MYRTER'S SPANISH INQUISITION.'

—
ELECTRIC FANS.

PRICES: \$1, and 50 Cents.

Hongkong, July 17, 1907. 1167

この1907年7月17日付の広告は1907年7月20日（土）に開催が予定されていた映画上映の告知である。広告は映画上映日まで同じ文言で繰り返された。ただし、7月20日の上映当日は「ON SATURDAY NIGHT NEXT」の一文が「TO-NIGHT! TO-NIGHT!」に変更される。

上映場所は香港の中環雲咸街にあったワイズマン大ホールである。上映された映画『スペイン異端審問』*Martyr's Spanish Inquisition* はパテ社の *Les*

Martyrs de l'Inquisition (1905年) だったと考えられる。席料は1ドルまたは50セント、上映開始は毎晩9時だった。

ワイズマン大ホールのこの興行は映画を2,3日の間隔で交換している。例えば7月22日付『チャイナ・メール』の広告は、7月20日付の文面とほぼ同じまま、上映映画のタイトルが『スペイン異端審問』から『鳴鐘係の娘』*The Bell Ringer's Daughter* (1906年) に替わる。その後、同じタイトルが1907年7月24日まで続き、25日から映画は『西部のアパッチ』*Hooligans of the West* と『命知らずの娘』*The Desperate Girl* に替わる。同じ興行主が同じ場所で連続興行し、上映映画を取り替えているのだが、これは劇場を借りる興行主の交代により上映映画がかわる草創期の興行形態とは異なる。

広告で宣伝された上映映画はすべてパテ社の製作した映画だったと考えられる。例えば『鳴鐘係の娘』はパテ社の *La fille du Sonneur* (1906年)、『西部のアパッチ』は *Les apaches du Far West* (1907年)、『命知らずの娘』は *La désespérée* (1906年) であろう。また、1907年7月31日から『チャイナ・メール』に予告が掲載され、8月3日から21日頃まで上映された『イエス・キリストの生涯と受難』*Life and Passion of Christ* は、パテ社の *Vie et Passion de N.S Jésus-Christ* (1907年) である。

『イエス・キリストの生涯と受難』は当時のパテ社の目玉商品だった。この映画は受胎告知や東方三博士の礼拝、出エジプトなど聖書の中から33の場面を選び、タブロー形式で映画化した作品である。パテ社の映画販売カタログには、第一部「キリストの降誕」524フィート、第二部「キリストの幼少時代」541フィート、第三部「奇跡とキリストの生涯」705フィート、第四部「キリストの受難と死」1,344フィートの4部構成、計3,114フィートとある。上映時間は1時間半だった³⁹⁾。当時の標準的な映画が100から400フィートだったことを考えると、この作品はかなりの長編である。

広告にはワイズマン大ホールでの興行主は「CINEMATOGRAF PATHE」とある。ただし、この表記だけでは興行主がパテ社なのか、それともパテ社の映画を所有する巡回興行者なのかははっきりしない。とはいえ、この興行主が

パテ社の目玉商品を次々紹介し、当時大変高価だった映画を豊富に所有している様子から、これが香港に上陸したパテ社のお披露目興行だった可能性は高い。だとしたらパテ社の香港代理店も同じ頃に開業したと考えられる。すると、香港の代理店開業は、シンガポールの後、上海の少し前、マニラの約1年10か月前だったことになる。

欧州企業として初めてアジアに進出したパテ社がその活動拠点に選んだ最初の地はシンガポールだが、その次に選んだのが香港だったことはアメリカ商務省の報告からも推察できる。両方ともイギリスの植民地であり、中継貿易が盛んだった。とくに香港は欧米の対中国貿易の窓口として期待され、映画はロンドンのパテ社から船で英領シンガポール、香港、そして上海へと運ばれた⁴⁰⁾。パテ社の目指すアジア映画供給網の構築に香港が重要な役割を果たしていたことは確かである。

他方、欧州に遅れてアジア映画市場に乗り出すアメリカも香港に注目する。アメリカがアジア市場開拓に積極的な姿勢を示すのは辛亥革命の頃で、アメリカ商務省が初めて調査したアジアの映画市場は香港だった⁴¹⁾。香港以南の市場はポルトガル人が独占していたが、イギリス式資本主義が発展し、植民地ビジネスが盛んな香港はアメリカにとって最もアクセスしやすい都市のひとつだったといえよう。アメリカ政府は香港をフィリピンやインドシナ半島、マレー半島、中国北部などに映画を配給するネットワークの中核と位置づける⁴²⁾。この政府の姿勢に同調するかのようになり、その頃から香港にはアメリカ資本の映画供給会社や製作会社、アメリカ映画の上映劇場などが設立される⁴³⁾。

こうして香港は早くに欧州とアメリカの両方から伸びるグローバルな映画流通網に接続され、アジア映画流通の最重要拠点のひとつとして重要な役割を果たし続けることになる。

パテ社上陸後の香港市場変容

では香港の映画市場はパテ社の上陸後どのように変化したのだろうか。シンガポールや上海、マニラの場合、パテ社は現地代理店を開業する前後に必ず地

元の大きな劇場と交渉し、それらの劇場を拠点に映画供給網を広げ、市場規模を拡大している。前述したように香港でも1907年以降、ビジョー劇場を皮切りにヴィクトリア劇場や香港劇場など先行研究が「映画館」とみなす劇場が次々開場する。パテ社がこれらの劇場と交渉していた可能性は高いが、根拠となる資料はまだ見つかっていない。そこで以下では、これらの劇場が開場後どのような興行をしていたのかを調査し、そこから香港市場でのパテ社の足跡を推考する。

まずは香港初の劇場と言われるビジョー劇場である⁴⁴⁾。劇場の経営者はユダヤ人のレイ(Ray)と中国人の盧根の二人。収容人数600人程度の中規模劇場で、1907年9月4日に雲咸街、別称フラワー通りに開場した。当時のポストカードを見ると、香港基督教青年会 Y.M.C.A. がビジョー劇場の近くにあったことがわかる。よって同劇場の観客は、Y.M.C.A. に入出入りするような在香港の外国人や裕福な中国人が多かったと考えられる。

次はヴィクトリア劇場である。場所は徳輔道中と砵甸乍街の交差点の海側にあった。チケットはロビンソン・ピアノ社でも販売していた。ロビンソン・ピアノ社はシンガポールやマニラなどで映画の輸入販売および興行に携わっていた貿易商である。



フラワー通り 右角は Y.M.C.A. 右沿道奥の木と木のあいだがビジョー劇場
(上海市歴史博物館編『香港旧影』上海書画出版社、2010年、61頁)

ヴィクトリア劇場は先行研究の表記に揺れがある。羅維明は「域多利新法活動影画／Victoria New Style Motion Picture」と記すが、余慕雲は「域多利電影院」、『中国電影図史（1905-2005）』は「域多利影画戲院」と記す。皆それぞれ劇場開場日を1907年11月7日、住所を徳輔道中と砵甸乍街の交差点としているので同一劇場を指すことは確かである。

一方、英字新聞『チャイナ・メール』には「ヴィクトリア・シネマトグラフ（Victoria Cinematograph）」とある。これがのちに「ヴィクトリア劇場（Victoria Theatre）」と改称される。同新聞に掲載された開場日は1907年10月31日とあり、先行研究と異なる。先行研究では根拠となる資料は示されていないが、おそらく華字新聞だと思われる。だとすれば、こうした開場日の違いは英字新聞と華字新聞で読み手が違うことから、ヴィクトリア・シネマトグラフが外国人向けに先行開場していた可能性が考えられる。以下に1907年10月31日付『チャイナ・メール』に掲載された開場予告の広告を記す。

To-day's Advertisements
TO-NIGHT
GRAND OPENING
OF
THE VICTORIA
CINEMATOGRAPH,
DES VOEUX ROAD
(POTTINGER STREET CORNER).
Splendid and Comfortable
Saloon.
—
SPECIAL DISPLAY OF
MAGNIFICENT MOVING
PICTURES.

TWO PERFORMANCES.

7 p.m. to 8.45 p.m.

9 p.m. to 11 p.m.

ADMISSION:

Box Seat … … … \$1.00

First Class … … … .70

Second Class … … … .40

Hongkong, October 31, 1907. 1746

ヴィクトリア・シネマトグラフは1910年春頃、徳輔道中のセントラル市場近くに一時移転するが、1911年に元の場所に戻る。これは劇場を新築するためだったと考えられる。劇場名をヴィクトリア・シネマトグラフからヴィクトリア劇場に改称するのも、この時であろう。

注目したいのはその興行内容である。『チャイナ・メール』の広告には、映画ではなく、ヴォードヴィル芸人が頻繁に宣伝されている。例えば1908年10月27日はフィリス・エディ・マクドナルド嬢 (Miss Phyllis Eddie Macdonald) など、1909年3月3日はヴィオラ・C・クーパー嬢 (Miss Viola C. Cooper) などの舞台が宣伝されているものの、映画の宣伝はない⁴⁵⁾。また、舞台と映画の両方を宣伝する場合も、舞台はスティーヴ・アズン & ジェシー・ソーン (Steve Adson & Jessie Thorne) など個人名をあげているが、映画は「COMIC AND DRAMATIC FILMS」とだけで具体的な題名の記載はない⁴⁶⁾。映画の題名が記載されるのは、例えばパテ社の『イエス・キリストの生涯と受難』など特別な作品の場合のみで、それも舞台と一緒にである⁴⁷⁾。このことからヴィクトリア・シネマトグラフは映画と舞台を一緒に提供する興行場だったことがわかる。よって「シネマトグラフ」を冠した劇場は当時、舞台しか興行しない従来の劇場と差別化するため舞台に加えて映画も上映するという意味で、館名に「シ



ヴィクトリア・シネマトグラフの裏手にあった華人居住区の萬宜里
（上海市歴史博物館編『香港旧影』上海書画出版社、2010年、67頁）

シネマトグラフ」を用いていたと考えられる。ゆえに「シネマトグラフ」と名のつく当時の劇場を現在の「映画館」と同一視することはできない。

最後は、李璋と李琪が開場した香港劇場（香港影画戲／香港影画戲院）である。この劇場は中環德輔道中のセントラル市場の向かいにあった。『チャイナ・メール』には香港シネマトグラフ（Hongkong Cinematograph）とある。開場日ははっきりしないが、『チャイナ・メール』に広告が掲載され始めるのは1908年1月であることから、その頃までに開場したと考えられる。広告にはアダラ嬢（Miss Adala、アデア嬢の間違いと思われる）の一座によるドラマやアクロバットなどの舞台が宣伝されている⁴⁸⁾。『ナイアガラの滝』*Naiagara Falls*など映画の宣伝もあるが⁴⁹⁾、ヴォードヴィル芸人の方がずっと多い。席料は1ドル、50セント、25セントで、安い価格帯がヴィクトリア・シネマトグラフより充実している。

香港シネマトグラフの広告は1910年には『チャイナ・メール』から消え、代わりにエンパイア劇場（奄派亞戲院／Empire Cinematograph Theatre）の広告が掲載される⁵⁰⁾。エンパイア劇場の住所が香港シネマトグラフと同じことから、両社は同じ建物を使用していたことがわかる。おそらく劇場経営者が代わ

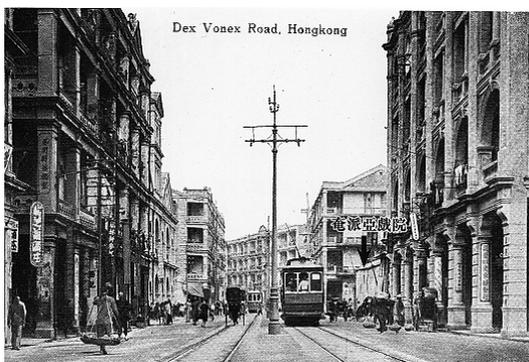
って劇場名が改称されたと考えられる。

香港の英字新聞には上記の3つの劇場のほかに、先行研究では言及されていない劇場の広告も掲載されている。例えばスタア・シネマトグラフ (Star Cinematograph) やアレクサンドラ・シネマトグラフ (Alexandra Cinematograph), サロン・シネマ劇場 (Salon-Cinema Theatre) などである。

スタア・シネマトグラフはアメリカ人が中環雲咸街に開場した西洋式劇場で



香港シネマトグラフ, 1908年頃, 干諾道中(海側)から撮影
(鄭寶鴻編著『百年香港華人娛樂』経緯文化出版, 2013年, 60頁)



エンパイア劇場(同じ建物), 1911年頃, 德輔道中(山側)から撮影
(鄭寶鴻編著『百年香港華人娛樂』経緯文化出版, 2013年, 61頁)

ある⁵¹⁾。1909年3月20日に開場する予定だったが、映写装置が故障して22日に延期された⁵²⁾。興行は映画と舞台の両方で、舞台はロッティ・オットレイ (Lottie Oatley) などヴォードヴィル芸人の歌や踊りが中心だった⁵³⁾。席料が40あるいは20セントと廉価なことから、大衆的な劇場だったと考えられる。

アレクサンドラ・シネマトグラフは中環泄蘭街2号の時計塔の近くにあった。開場日ははっきりしないが、1909年1月から広告を掲載し始めることから、その頃までに開場したと考えられる。1909年1月21日付『チャイナ・メール』の広告によれば、『救急犬』*The Ambulance Dogs* (1908年) や『おじさんの財産』*Uncle's Fortune* (1908年), 『戦場の兄弟』*Brothers in Arms* (1908年) などパテ社の映画8本を毎晩9時15分から上映するという⁵⁴⁾。しかし、やはり映画専門ではなく、ラ・ベラ・チキータ (La Bella Chiquita) 嬢の歌やアミティ・リタ嬢 (Miss Amity Rita) の踊りなどの舞台を映画上映の前に公演する日もあった⁵⁵⁾。席料は1ドル20セント、80セント、50セントと高めに設定されていることから、高級劇場の類に入る劇場だったと考えられる。

サロン・シネマ劇場は1910年1月までに中環雲咸街、郵便局の反対側に開場した⁵⁶⁾。経営者はアレックス・アルマゾフ (Alex Almazoff) である。興行はやはり舞台と映画の両方、映画は月曜と金曜に交換し、夜6時30分と9時15分の2回興行だった。この劇場は芸人の賃金未払いで裁判沙汰になったことから、パテ社と契約するほど組織的な運営の劇場ではなかったと考えられる。

このように香港では1907年にパテ社が上陸して以降、複数の劇場で映画が盛んに上映されるようになる。なかでもヴィクトリア・シネマトグラフとアレクサンドラ・シネマトグラフの2つの劇場はパテ社から映画の供給を受けていた可能性が高い。それはそれらの劇場が『イエス・キリストの生涯と受難』などパテ社の最新映画を上映し、かつ香港で比較的大きな劇場だったからである。パテ社が新たに進出した都市で大きな劇場と交渉を持つことはシンガポールや上海、マニラの事例で示したとおりである。

アジアのなかの香港映画市場

1907年以降の香港の市場変化をアジアのなかで俯瞰して見ると、香港はアジアの大きな開港都市とほぼ同じ時期に似たような経験をしていたことがわかる。パテ社はローカルな映画市場の興行形態を変容させ、市場規模を急速に拡大させるとともに、香港のような植民地や半植民地の開港都市を結節点としてアジア市場をグローバル映画供給網に縫い込んだ。それによりアジアの映画市場はダイナミックな発展を遂げたのである。

こうした草創期のアジア映画供給網の構築に重要な役割を果たしていたのは、欧米およびアジアの巡回興行師、移民の劇場経営者、輸入貿易商などである。例えば、香港のヴィクトリア劇場の興行チケットを販売していたロビンソン・ピアノ社は、シンガポールやマニラでもパテ社の装置や映画の輸入販売および興行に関与していた輸入貿易商で、同社はアジア各地で同様の事業を展開していたと考えられる。ほかにもレヴィ兄弟 (Levy Hermanos) やルイ・M・レヴィ (Louis M. Levy)、アントニオ・ラモス、C・アルカンなどがアジアのあちこちで映画の供給や興行に携わっていた。彼らがアジア映画供給網の形成に果たした役割は大きい。

香港映画市場の特徴はマニラと比較するとわかりやすい。マニラではパテ社の代理店開業後、映画専門の劇場が次々開場する。だが、香港ではそうした現象は起こらない。確かに先行研究が明らかにしたように香港でも1907年以降、劇場が次々開場し、映画の上映機会も増える。しかし香港では、舞台のあとの第二興行で映画を上映したり、美術館の常設展示と特別展示のように映画を常時興行しつつもヴォードヴィル芸人を興行の目玉にしたりする混成興行が圧倒的に多い。つまり、パテ社が上陸し市場が激変する点は香港もマニラも同じだが、香港の場合、映画専門劇場の登場に時間がかかるのである。香港で映画の専門興行——現在いう意味での「映画館」——が定着するのは1910年代中頃以降と考えられる。

5 結言

20世紀初頭のアジアで新しい興行形態の誕生とその浸透，劇場開場ラッシュと映画市場規模の拡大，映画供給網の拡張と交渉の複雑化などダイナミックな変容が起こるのは，アジアがパテ社のグローバルな巨大映画供給網に接続されたことによるものである。

そのアジア映画市場で香港が果たした役割は重要である。香港は当時世界の海運力と物流網を誇っていたイギリスの植民地だったことから，シンガポールの次に欧州資本が進出し，欧州とアジア各地をつなぐ拠点として機能する。また1910年代初頭に欧米諸国が巨大市場の中国に大きな期待を寄せるようになると，香港はその窓口として注目される。とくにアメリカは，香港をアジア映画市場開拓の拠点として位置づけ，その交渉の密度を深めていく。香港がグローバルな映画供給網の形成とアジア映画市場の発展に及ぼした影響は大きく，今後さらに研究を深める必要がある。

注

- 1) Law, Kar, and Bren, Frank, and Ho, Sam, *Hong Kong Cinema: A Cross-cultural View*, Scarecrow Press, 2004, 6-8.
- 2) 上海市歴史博物館編『香港旧影』上海書画出版社，2010年，93-95頁。
- 3) *China Mail*, April 28, 1897, 2.
- 4) 例えば *North China Herald*, September 10, 1897, 498にはシャルベが上海のライシャム劇場で興行した様子が報じられている。
- 5) 『申報』では1910年代中頃に劇場を示す漢字が「戲園」から「戲院」に代わる。おそらく，この頃中国では劇場の運営機構や社会的役割などが変化したと考えられる。
- 6) 羅維明「香港早期的電影軌跡（1896-1908年）」『第十九屆香港國際電影節』香港市政局，1995年，20-22頁（英訳：Law, Wai-ming, “Hong Kong’s Cinematic Beginnings 1896-1908”, *the 19th Hong Kong International Film Festival*, Urban Council, 1995, 23-26）。鐘寶賢『香港影視業百年』（増訂版），三聯書店（香港），2011年，48頁。
- 7) Hoffman, Hugh, “Film Conditions in China,” *Moving Picture World*, July 25, 1914, 577.
- 8) 羅維明「香港早期的電影軌跡（1896-1908年）」，20-22頁。
- 9) 余慕雲『香港電影史話 默片時代1896年～1929年』（第1卷）次文化堂，1996年，15頁。
- 10) 趙衛防『香港電影史 1897-2006』中国廣播電視出版社，2007年，14頁。

- 11) 羅維明「香港早期的電影軌跡（1896-1908年）」, 21頁。
- 12) *Hongkong Telegraph*, April 25, 1899, 2.
- 13) *Hongkong Telegraph*, January 15, 1900, 2.
- 14) ホークス・ポット『ポット上海史』生活社, 1940年, 114頁。
- 15) 羅維明「香港早期的電影軌跡（1896-1908年）」, 21頁。
- 16) 余慕雲『香港電影史話 默片時代1896年～1929年』（第1卷）次文化堂, 1996年。中国電影図史編輯委員会編『中国電影図史（1905-2005）』中国伝媒大学出版社, 2007年。周承人, 李以庄『早期香港電影史：1897-1945』上海人民出版社, 2009年。鐘寶賢『香港影視業百年』（増訂版）, 三聯書店（香港）, 2011年。
- 17) *Singapore Free Press and Mercantile Advertiser*, August 1, 1899, 2.
- 18) *Straits Times*, August 16, 1899, 2.
- 19) *Eastern Daily Mail and Straits Morning Advertiser*, May 11, 1906, 3.
- 20) *Eastern Daily Mail and Straits Morning Advertiser*, August 13, 1907, 2.
- 21) 例えばアメリカでパテ社の映画『日本』*Japan*は623フィート\$74.76USドル、『ナイアガラ』*Niagara*は606フィート\$72.72USドルで販売されていた（*Moving Pictures: Catalogue*, Pathé Frères, 1909）。1フィート当たりの販売価格はシンガポール（12セント）と同じである。
- 22) ミレットは1907年末にドレフェスがアルハンブラを開場し, 1914年まで経営したと述べる（Millet, Raphaël, *Singapore Cinema*, Editions Didier Millet, 2006, 17）。だが, 正確には1907年10月にウィリスがアルハンブラを開場し, パテ社シンガポール総代理店のドレフェスがそれを1907年12月に買収する。
- 23) *Straits Times*, August 16, 1907, 4. ビルマはミャンマー, ジャワとスマトラはインドネシア, シヤムはタイの旧名。
- 24) 黄德泉「電影初到上海考」『中国電影年鑑』中国電影出版社, 2008年, 345-353頁（『電影藝術』第3期, 中国電影家協会, 2007年, 102-109頁初出）。定説に関しては例えば程季華主編『中国電影發展史』第1卷, 中国電影出版社, 1980年（程季華, 李少白, 邢祖文編著『中国電影發展史』第1卷, 中国電影出版社, 1963年）など多数。
- 25) Law, Kar, and Bren, Frank, and Ho, Sam, *Hong Kong Cinema: A Cross-cultural View*, Scarecrow Press, 2004, 3-18.
- 26) 「活小照」『新聞報』1897年5月30日付（黄德泉「電影初到上海考」, 349頁所収）。
- 27) *North China Herald*, October 10, 1908, 102.
- 28) *North China Herald*, February 20, 1909, 476. *North China Herald*, December 23, 1911, 819. Johnson, Nelson T., "China," *Daily Consular and Trade Reports*, Bureau of Foreign and Domestic Commerce, Department of Commerce, May 10, 1913, 728.
- 29) Xu, Meimei, *Knowledge Development: Cinema in China prior to WWI*, Dissertation: Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn, 2016, 170-174. 劉思羽『中国影院簡史』中国電影出版社, 2015年, 18-19頁。

- 30) 例えば甬力「我国第一座影院今何在？」『上海電影史料』第5輯，上海市電影局史志弁公室，1994年，99頁，あるいは「中国早期電影發展回顧」『中国電影年鑑 中国電影百年特刊』中国電影出版社，2005年，147頁など多数。
- 31) *China Press*, March 14, 1926, 10.
- 32) Johnson, Nelson T., “China,” *Daily Consular and Trade Reports*, Bureau of Foreign and Domestic Commerce, Department of Commerce, May 10, 1913, 728. ラモス社はほかにニューヨークや上海の中古映画市場からも映画を入手していた。
- 33) *North China Herald*, August 14, 1920, 439.
- 34) *North China Herald*, October 25, 1907, 248.
- 35) 『申報』1908年7月28日，7面。
- 36) 『申報』1910年4月19日，8面。『申報』1910年4月27日，8面。
- 37) マニラ映画市場の形成と変容については拙稿「パテ社のマニラ進出と映画館—マニラ映画興行史1909-1910」『演劇研究』第40号，早稲田大学坪内博士記念演劇博物館，2017年，1-22頁を参照。
- 38) 中国電影図史編輯委員会編『中国電影図史（1905-2005）』，27頁。
- 39) *China Mail*, August 5, 1907, 5.
- 40) Carleton, A. E., “The Camera in the Far East,” *Daily Consular and Trade Reports*, Bureau of Foreign and Domestic Commerce, Department of Commerce, April 16, 1913, 304.
- 41) Anderson, George E., “China,” *Daily Consular and Trade Reports*, Bureau of Manufactures, Department of Commerce and Labor, August 22, 1911, 820.
- 42) Anderson, George E., “Cinematograph for the Chinese,” *Daily Consular and Trade Reports*, Bureau of Foreign and Domestic Commerce, Department of Commerce, November 29, 1913, 1101.
- 43) 例えば前掲の“Cinematograph for the Chinese”には，中国語字幕付きアメリカ映画を上映する劇場が九龍に開場予定とある。またベンジャミン・プロツキーは遅くとも1912-13年に香港で映画上映などの事業を始め，1914年に中国製造影片有限公司を設立する。
- 44) ビジョー劇場に関しては複数の文献がほとんど同じ記述であり，情報も少ない。羅維明「香港早期的電影軌跡（1896-1908年）」，21, 25頁。余慕雲『香港電影史話 默片時代1896年～1929年』，36-37頁。鐘寶賢『香港影視業百年』，47頁。周承人，李以庄『早期香港電影史：1897-1945』，20頁。
- 45) *China Mail*, October 27, 1908, 4. *China Mail*, March 3, 1909, 5.
- 46) *China Mail*, March 10, 1909, 4.
- 47) *China Mail*, March 19, 1909, 4.
- 48) *China Mail*, January 14, 1908, 1.
- 49) *China Mail*, April 20, 1908, 4.
- 50) *China Mail*, April 2, 1910, 6.

- 51) *China Mail*, March 16, 1909, 5.
- 52) *China Mail*, March 22, 1909, 4.
- 53) *China Mail*, March 19, 1909, 4.
- 54) *China Mail*, January 21, 1909, 8.
- 55) *China Mail*, July 16, 1909, 1.
- 56) *Hongkong Telegraph*, January 29, 1910, 5.